

サ
バンチ
谷
克
二

バナ

谷 克二



サバンナ

谷 克 二

昭和51年1月30日 初版発行

発行者 角 川 春 樹



印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 宮 田 製 本

発行所 株式 会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13 ㊟ 195208

TEL 東京 (265) 7111 <大代表> ㊟ 102

Printed in Japan

© Katsujō Tani 1976

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872157-0946(0)

《目次》

追うもの — 三

白牛の山 — 五

北の狩人 — 一五

サバンナ — 一六三

後記

三六

装
幀
日
暮
修
一

追
う
も
の

レオ・リチャードソンは、山を見ていた。ごついツァイスの双眼鏡を太い節くれだった十本の指でささえ、上体をゆったりとランドローバーのフロントにもたせかけて山並みを観察していた。

彼と私の前には、ゴッドレーリバーの広い河床がひろがり、対岸にはマウント・クックとその連山がそびえ立って、ゆるやかな勾配の山裾が河床へとつながっていた。中腹は、斧で断ち割られたような崖になっていたが、その上の峰々は新雪をかぶってたおやかにうねっていた。神々の巨大なソファーのようだ、と私は思った。

レオ・リチャードソンは初老のプロ・ハンターだった。大男で、私より頭一つは大きいから、優に二メートルはこえている。がっちりとした骨組みの身体で、広い肩がアメリカン・フットボールのプロテクターをつけたようにもりあがっていた。

ラグビーのボールのような頭がその上にのっけていて、銀髪が短くかりこまれ、顔の中央からは同じ色の眉が左右にはねあがり、その下に、大きくするどい灰色の眼がひかっていた。それらは、赤銅色に灼けた顔の色とあいまって、写真の陰画の人物を見るような印象をあたえた。

眉のつけ根から鼻がもりあがっていた。鼻すじが通っていれば「ローマ鼻」とよばれるやつだったが、それは中ほどからふくらみをつけてまがっていた。

「いわゆるフックだよ」

最初の晩、ホテルのバーで一ぱい飲んだとき、彼は自分でその特徴のある鼻をそうよび、大口をあ

けて笑った。

職業的なきさくさを身につけた男であった。酒もずいぶんと強かったが、ある程度をこすとふっと黙りこくった。そんなときには、深い穴の中で光る燐のような光芒を瞳に宿した。

しかし、狩人としては理想的だった。眼はするどい観察力を示し、身体はしなやかに動き、歩き方は軽く、老人臭さはどこにもなかった。

ライフルは、口径三〇・〇六のフィンランド・サコーだった。二十二インチの細い銃身は、みがきこまれた黒檀のような光沢を帯び、銃床には、いたるところに小さな傷がついていた。頬当ての部分が、頬の広さだけニスがはげおち、持ち主とすごしてきた時間の長さと、何百という獲物との出会いを物語っていた。 unnecessary 部分が一切とりはらわれたライフルは、すでに彼の肉体の一部だった。

空は晴れ渡っていた。雲が一つ主峰のマウント・クックの肩にひっかかっているだけである。その下からフーカ氷河が氷の襷をかさね合わせ、グロテスクな白の堆積物となって流れ出していた。

「タニ、見てみろよ」リチャードソンは双眼鏡をわたすと、むかいの山の頂上付近を指さした。

「あそこだ。あの岩棚の上だ」

私は双眼鏡を眼にあてた。彼の人差し指の延長を追うと、眼の前を崖が流れ、尾根の雪が走り、その下に雑草におおわれた岩棚があらわれた。

一頭の動物がゆっくりと草を喰んでいた。牛に似ていた。筋肉のはった、たくましい褐色の身体が緑の草からうかび上がり、金色のたてがみが山風をうけて豊かにふくらんでいた。角が猛禽類の爪のようにまがり、頭をうごかすたびに秋の陽にぶくひかった。

「タールだ」とリチャードソンが言った。「どうだ、ライオンみたいなたてがみをしてるだろう？」
私は双眼鏡を眼にあてたまま訊いた。

「レオ、あれは撃てないか？」

彼は高い声をたてて笑った。

「あそこまで行くだけで一日はかかるぜ。タールが待っててくれるかね？」

距離感に狂いが生じていた。余りに空気の透明度が高いからである。たしかに、そこまでは直線距離でさえ四千メートル以上はあった。

「行こう」と彼はうながした。「もうすぐ暗くなる。陽のあるうちに狩小屋に入ろうぜ」

ゴッドレーリバーの河岸に建てられた狩小屋は小さな台地の上にあった。タソックスとよばれる背の高い雑草の中から、のびあがるように石造りの煙突がつきでいて、丸太の小屋がそれにすがりつくようにして立っていた。全体がひどく不調和で頼りなくみえたが、近づいてみると太い丸太はお互いにしっかりとかみ合い、すぎ間には赤土が詰められていた。屋根はアルミの板でふいてあった。

重いドアは人のうめき声のような嫌な音をたてた。ドアのすぐ横に石を組んで造った暖炉があり、その上に太い柄のついた薪割り用の斧が薄綿のような埃をかぶっていた。中央に樺の丸太を割って作ったテーブルがすえられ、両側にベンチが一つずつおいてあった。暖炉とむかいあった壁には木製のベッドが二つならんでいた。その上は小窓で、ゴッドレーリバーの河床と対岸の峰が見えた。

タソックスが斜光をあびて深い金色にかがやいていた。崖の亀裂や、谷間は濃い陰翳でおおわれは

じめていた。

リチャードソンはマツトレスの野鼠ねずみの糞ふんを手ではらい落とし、長いこと来てなかったので、と子供のような口調で言った。テーブルの上にも埃が白くつもっていて、掌ではらうと韃ふだでふかれたように舞いこった。

「タニ」とリチャードソンが私をよんだ。「すまんが薪を作ってくれんか。その間に俺おれは小屋の中をかたづける」

私は手斧をはずすと、埃をはらい、シャツの腕をまくりあげながら外にでた。冷えた空気が身体に露出した部分をさした。陽はすでに山の端に沈もうとしていた。峰の稜線りやうせんだけが残照をあびて暗みをました空に浮かんでいた。遠くでカナダ雁がのさわぐ声が聞こえた。

狩小屋の裏手には一かかえもある樺の木、丸太が五本、タソックスをおしつぶしてころがっていた。私は手頃な太さのやつを一本ひきずりだし、斧で断ち割っていった。打撃を加えるたびに木くずがとび、乾いた木の香が薄闇うすぐらみに流れた。額に汗がういてきた。やがて手に痺れしびれが走りはじめ、その頃には丸太は小さな薪の山に変わった。私は、それをたばねて小屋にはこびこんだ。

炉の中に薪を組みライターの炎をちかづけた。樺の表皮はすぐに火をとって勢いよく燃えはじめ、炎で小屋の中がうすぼんやりと明るくなった。リチャードソンの姿が不鮮明な輪郭でうかびあがった。ランプを組みたてていた。テーブルの埃がきれいにはらわれ、二挺ふたとのライフルがよこたえてあった。細い銃身が暖炉におどる炎の動きをとってするどさをました。二十発入りの実包の箱が五個、きちんと重ねられていた。寝袋シュラフは、まだまるめられたままベッドの上にくるがしてあった。

「さあ、これから四日間だぜ」とリチャードソンが笑顔をむけて歌うように言った。眼の下が刷毛^{はけ}で掃いたような赤味をおびていた。狐は不思議な媚薬^{びやく}をもっている。どんな経験をつんだハンターでも狐の前はこいつにやられる。プロとはいえ、リチャードソンはもうそいつにとりつかれたらしかった。ランプに火をいれて天井から下がってきている鉤^{フック}にかけると、小屋の中が急に明るくなり、空気が暖かみをました。彼は上機嫌^{きげん}だった。古いアイルランド民謡を鼻歌でうたいながら肉を切りはじめた。彼の太い腕がハンティング・ナイフをつかみ、するどい刃を軽くひくと、全くあっけないほど簡単に分厚い肉片がはずれた。彼はそれを油をひいたフライパンにのせ、二枚のレア・ステーキを作った。それと、パンと生のトマトがその日の夕食であった。

瀬の音が夜明けのおとずれと共に次第に低くなってきた。明けがたの空気が寝袋^{シュラフ}を透して伝わり、足先が湿った布をまきつけられているように冷えた。外はまだ暗かった。私は腕をだして、時計を見た。夜光塗料の文字盤と針が六時すこし前をさしていた。

寝袋^{シュラフ}のジッパーをひいた。その音でとなりのベッドのリチャードソンが眼をあけた。「早いな」と彼は声をかけてきた。

寝袋^{シュラフ}をぬけだした。暖まっていた身体が朝の冷氣で急に冷えた。狐靴^{きつぷ}をつっかけ、分厚いドアをおして外にでた。カナダ雁^{がん}が移動を開始していた。ギャーッギャーッという、のしり合うような鳴き声と、空気をうち重い羽音がかさなり合って、黎明^{れいめい}の空からふってきた。マウンツ・クツクの頂だけが、ほのかなうす紫色の縁どりをみせて浮かび上がり、十羽ほどの群れが、一列にならんだ点となっ

てゆっくりとその方角にむかっていた。

リチャードソンが、羊の毛で編んだ白いセーターに首を通してながら出てきた。彼は、河の方をむくとペニスをつかみだし、勢いよく放尿をはじめた。しぶきがとび、湯気が上がり、朝風に流れてきた。私は彼とならんで立ちながらたずねた。

「今日はどうするんかね」

「赤鹿 レッド・スタグ をねらってみよう。駄目ならタールだ。昨日みたいなでっかいやつをな」

彼は腰をふって小便のしずくを切った。「ところで朝飯の卵はいくつにする？」

「五つたのむ。それにベーコン三枚。ただしサندانみたいにでかいやつ」

彼は片目をつぶってウインクした。

「まかしときな。塩気をたっぷりきかしてやるぜ」

「おい、手はちゃんと洗えよ！」

彼ははじけるような笑い声をたて、ズボンのボタンをはめながら小屋に入っていた。

朝食がすむと、出発の準備にとりかかった。私は二十発の弾をさしこんだ弾帯をつけ、左の腰に厚刃のハンティング・ナイフを通した。リュックサックには予備の弾を二十発、ボックスにつまっただま入れた。あとは、山での冷えこみの用意に目のあらいセーターを一つ突っこんだ。

リチャードソンは、その日の必要なものを全部テープルの上にならべていた。昼食用の冷肉、それに一塊のパン、双眼鏡、マニラ麻で編んだ四十メートルのザイル、ハーケン、カラビナにハンマー、それにするどい細身のハンティング・ナイフ二本。ライフルの弾が十発——これは弾頭を上にしてき

れいに一列に立てられていた。細長い万年筆のような真鍮しんちゆうのケースに赤銅色の弾頭がはめこまれ、その先端に鉛がのぞいていた。いわゆるソフト・ポイントとよばれるタイプであった。彼は、それらの品を一つ一つ確認するようにして、リュックの中に入れた。ライフルの弾はまとめてズボンの右のポケットにつっこんだ。

私とリチャードソンは小屋をでると上流にむかった。彼が先にたち、少し間隔をあけて私がつづいた。細長いタソックスの葉にやどった朝露がクリスタルガラスのような光芒をはなち、光の束となつて幾重にも織りあい重なりあつて、溪たにの奥へとのびていた。二人はそれを膝ひざでけちらしてすすんでいた。半防水のズボンがぬれ、前を行くリチャードソンの動きではね上がる草露が、腰の弾帯に茶色のシミをつけていった。それがつながり、やがて弾帯が水につけたようにぬれた頃、三つの溪間が合流している地点に着いた。地形は一変していた。山は眼の前で抜きあげられたように立ち、鋭い峰が錐すいのように中空にのび、流れは岩をかむ勢いで、白い泡あわをたてて落ちていた。

「右手の溪に入ろう」とリチャードソンがふりかえつて言った。「溪の入り口は滝になっているけれど、中はひろい草原なんだ。シャモアがよくいるし、ひよつとすると赤鹿に出会うかも知れん」

滝は十メートルほどの高さがあった。分厚い水の層が岩棚からおしだされ、地底じぞをうつような響きをたてながら、滝壺へ落ちこんでいた。私とリチャードソンは、飛沫しぶきでぬれてすべりやすい岩壁をホールドをとつてのぼつていった。

滝の上にひろがる草原は、よく色づいた小麦のようなタソックスでおおわれていた。両方の尾根からなだらかな傾斜が降りてきていた。少し高くなっている右手の尾根には、白いガーゼをかぶせたよ

うな雪溪が輝^{ひか}っていた。

リチャードソンは双眼鏡をとりだすと、観察をはじめた。こういう時の彼は、身体の線が厳しくひきしまる。獲物^{ゲイム}の発見に全神経を集中しているのである。

彼ははじめに左手の斜面を見ていた。なにも発見できなかったらしい。すぐ右手の斜面に移った。

ゆるやかに手が動いていく。やがて一点で、彼の手の動きが止まった。観察が一段とこまやかさを加え、双眼鏡を左手でささえると、右手でダイヤルを回して焦点を合わせていたが、そのうち右手の指を四つたてて「シャミー」と言った。そして手をのばして雪溪のなかほどを指さした。四つの黒い点が、白砂の上をはいまわる蟻^{あり}のようにうごいているのが見えた。

彼は双眼鏡をケースにしまいながら言った。「あれを追う。こちらはまだ陽かげにいるから連中は気づいてないはずだ」

私とリチャードソンは、すぐに追跡にかかった。小さな岩場から山にとりつき、ライフルの銃身をひからせないように、肩からおろした。タソックスの中を泳ぐように移動した。四つの点は、その間にも散ったり集まったりしている。

リチャードソンが歩きながら、それでも視線は前方からはずさず小声で言った。「風の具合もいい。逆だと俺達の匂いを上にはこんで、やつらに気づかれてしまう」彼は上機嫌だった。

「え、おい」と彼はまたよびかけてきた。「獲物^{ゲイム}をやるのも、女をものにするのも同じようなものだぜ。そうは思わんか、お若いの。なかなかものにならない、ジリジリしてくる。しかし、実はそんな時が最高なんだ」

——じいさん、調子がいいじゃあないか、と私は胸の中でつぶやいた。だけど獲物^{ゲイム}だけは見逃さんでくれよ。

距離は次第につまってきた。汗がふきだし、胸や背中をつたって流れていった。

シャモアは、雪溪を渡りはじめていた。ぬけるようなコバルト・ブルーの空と、白く光る尾根が境を作っているあたりを、一列になって頂上にむかってゆるゆる移動していた。距離はすでに五百メートルをきるまでになっていた。

「この反対側は滝があつてな、滝の落ち口は陽あたりのいい草場になっている。やつらはそこまで行くつもりだ。尾根を越すまでここで待とう。姿が見えなくなったらあとを追いかけて、そこでやろうぜ」

そういうと彼はライフルをもちあげ、右手で槓杆^{ボルト}を操作して遊底をあけた。薬室^{マガジン}が白銀色の腹をみせた。弾をとりだすと一つ一つ確かめるようにしておしこんだ。短く乾いた金属音が三度して、弾は薬室におさまった。それから槓杆^{ボルト}をゆくりとおしもどした。尾筒がなめらかにすべって黄色い薬莢^{マガジン}を、銃の後身^{ブリーチ}におしこみ噛み合った。槓杆^{ボルト}をもとの位置にもどすと彼はライフルを肩にかつぎあげた。

「俺は思うんだがね。獲物^{ゲイム}とハンターの関係はセックスと同じさ」彼は尾根を見ながら言った。

「ハンターは男で、やるためにおっかけ、女は獲物^{ゲイム}でやられる瞬間にむかつてにげる。俺は、何度も何故獵をするのかってきかれたが、《答えはない。ただ好きだからさ》としか言わなかった。なんのために女を抱くのかってきかれたってお前は答えられんだろう？ それは、人によって目的が千差万別だからよ」

四頭のシャモアは、彼の短いおしゃべりの間に尾根の反対側に姿を消した。

「さあ。行こうぜ」

リチャードソンはゆつくりと大きな歩幅で歩きはじめた。大まかな彼の動きも、尾根近くになると注意深くなった。彼は、シャモアがこえた場所から五十メートルほど下手にできるようにして雪溪を渡り、タソックスがほんのひとにぎりだけ雪の上にてている場所をえらんで身体をふせた。そして反対側をのぞいていたが、すぐに首をひっこめると私にむかつて言った。

「のぞいてみるよ、やつらがいるぜ」

私は膝を折って、彼のそばににじりよった。タソックスの茎の間を通して、深い沢と雪溪が見え、雪溪の先端が小さな岩棚をもった滝につづいていた。その上に一頭のシャモアが全身に陽の光をあびて立っていた。茶色い身体は日本鹿に似ているが少し小型で、頭をおおっている黒いマスクのように縞紋様がよく見えた。シャモアは鉤状の角のついた頭を終始うごかしていた。周囲を警戒しているのだろう。あとの三頭はブッシュの中にもいるのか見えなかった。私は首をひっこめた。リチャードソンが、吐く息にも注意するような低い声で言った。

「タニ、あんたは今の位置から射撃しろ。俺はもう少し上から撃つ。合図をするから、そしたら三つかぞえて身体を起こせ」

そう言う私の横を通り、姿勢を低くして素早く上手に出た。そして、右膝を折ると肩のライフルをおろした。右手がグリップをにぎり人差し指が軽く引き金にかかった。左手はバランスをとって銃をささえた。